

## キリスト教をめぐる諸問題 (3)

—救済をめぐる問題を中心に—

### はじめに

前回は、第1回のキリスト教講座において、皆さまから寄せられた質問の中から、差別と平和をめぐることがらについて検討いたしました。

最終回の今回は、主として、キリスト教における救い・救済をめぐる問題を中心に、皆さまといっしょに考えていきたいと思っております。そこでまず、これらに関する問題についてはどのような質問が出されたのか、そのことを確認しておきたいと思っております。

### 救い・救済をめぐる質問

救い・救済をめぐる質問については次のようなものがありました。

- Q1. キリスト教における救いの定義は何でしょうか？「だれの」、「何が」、「どのように」なれば救われたことになるのでしょうか？また、救いの定義に歴史の変遷はありますか？
- Q2. キリスト教において、救われるために必要なことは何でしょうか？「神を信じる?」、「洗礼を受ける?」、「聖餐にあずかる?」、「免罪符を買う?」・・・など、救われるためには何が必要と定義されていますか？また、救われるために必要なことに歴史の変遷はありますか？
- Q3. 次の場合、この人は救われますか？
- ① 幼い子供を何人も殺し、死刑判決を受けた殺人犯がいます。
  - ② その殺人犯が、教誨師（キリスト教の牧師）に出会い、自分の罪を悔い改め、洗礼を受けました。
  - ③ 洗礼後、この殺人犯に対して死刑が執行されました。

上記の場合、この殺人犯は救われますか？また、殺人犯に殺された幼い子供達は救われますか？（子供達は洗礼を受けていません）

\*

なお、救い・救済をめぐる質問以外に、これまで扱うことができなかった質問として、いわゆる、キリスト教の今、これらに関する質問がありました。それは次のようなものであります。

- Q4. 将来的に（この先）キリスト教はどのようになると思われますか？
- Q5. 街での伝道や訪問伝道、今の時代どう思いますか？
- Q6. 若者の教会離れが目立つのはなぜですか。魅力がないからでしょうか。

## キリスト教における救い

さて、そこでまずは、救い・救済に関する問題から検討していくことにしたいと思います。

救いは、キリスト教のみならず、およそすべての宗教にとってその中心テーマであるでしょうが、ことに、キリスト教においては、その信仰と、その宣教の中心に位置づけられると言ってよいでしょう。救いが神のみによって与えられるという信仰は、旧約聖書において明示され、キリスト教においては、キリスト・イエスの登場によって、この救いが決定的なものとなり、ユダヤ民族に対してのみならず、全人類に対して提供されることが言われるようになりました<sup>1</sup>。

ちなみに、イエスという名前は、ラテン語のイエスス、ギリシア語のイエススへとさかのぼり、さらには、旧約時代のヘブライ語では、ヨシュアあるいはイエホシュアと発音されることがあり、それは、「ヤハウエ（主なる神）は救いである」という意味をもっておりました。

そのイエスがキリストスであるということですが、このキリストスは、ヘブライ語ではマーシーアッハ、すなわち、神から塗油を受けたものとして捉えられており、これがキリスト教信仰の出発点であります。このような信仰に基づいて、キリスト教の歴史は展開されていくことになります。

ところで、「救い」「救う」を意味するヘブライ語の「イェーシュア」「ヤーシュア」は、語源的には、助ける、解き放つ、切り離す、離れさせる、治すなどの意味をもっています。これは、ギリシア語では、「ソーテリア」「ソーゾー」となりますが、これらについても、「助ける」「解き放つ」というヘブライ語と類似した意味であり、さらに、ラテン語における「サルス」「サルヴォー」もほぼ同様の意味と言ってよいと思います<sup>2</sup>。

キリスト教の歴史においても、その比較的初期の段階から、イエス・キリストがどのような存在であるかということは議論されてきました。それは神学的には、いわゆるキリスト論と呼ばれるジャンルを構成する問題群なのですが、長い議論のなかで、5世紀のカルケドン公会議において表明されたことは、「キリストは神にして人である」というものでした。キリストは神であり、また人である、ということは、いかにして可能なのでしょうか。このことを、その当時の人びと（知識人）に納得してもらうために、表明された文言は次のようなものであります。

わたしたちは、聖なる教父たちにしたがって、わたしたちの主イエス・キリスト、唯一の同一なる御子を信じます。そしてこの同一なるお方は、神であることにおいて完全であり、人間であることにおいて完全であり、真に神であり真に人であり、またこの同一なるお方は人間の理性的な魂と体から成っており、神であることでは御父と同じ本質、人間であることではこの同一なるお方はわたしたちと同じ本質であり、罪を除いてはすべての点でわたしたちと同様であるということを教えることでわたしたちは皆一致しております。また、神であることでは世の先に父から生まれ、人間であることではこの同一なるお方は終わりの時に、わたしたちのために、また、わたしたちの救いのために、神の母であるおとめマリアから生まれました。この唯一の同一なるキリスト、御子、主、独り子は、二つの本性において、混合することなく、変化することなく、分割することなく、分離することのないお方として認められます。また、両本性の区別は結合によって決して取り除かれることなく、かえって各々の本性の特質は保たれ、一つの位格、一つの実体に合一し、二つの位格に分裂されることも分割されることもなく、唯一の同一なる御子、独り子なる神、ロゴス、主イエス・キリストです。これはまさに、以前から預言者たちが、また、主イエス・キリストご自身が、御子についてわたしたちに教えたものであり、また、教父たちの信条がわたしたちに伝えたとおりであります<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 『新カトリック大事典 Ⅲ』（研究社、2002年）、p.502.

<sup>2</sup> 同上書

<sup>3</sup> 菊地榮三・菊地伸二『キリスト教史』（教文館、2005年）、p.156.

はなはだわかりにくいものであります。本当に当時の人々は、この言明に納得したのでしょうか。ただ、重要なことは、キリストが真の神でなければ、人間を救うことはできないし、また真の人間でなければ、わたしたち人間にとって救いとはならない、このことこそが重要な点でありました。

イエス・キリストがキリスト教の救いにおいてその中心から外れることはありませんでしたし、救う側の存在が揺らぐことはありませんでした。もし揺らぐとすれば、その考えは、キリスト教とは異なる考えを表明していると言ってもよいかもしれません。

ただ、救われる側から見た場合、そこにはいろいろと考える余地を残さなかったわけではありません。たとえば、救われるということはどういうことなのでしょう。その救いというのは、どのような形で実現するのでしょうか。またそれはいつ実現するのでしょうか。救いのために必要なことはどのようなことなのでしょう。こうしたことについては、それを考察するための余地がわたしたちにも残されているように思います。

\*

救いに関する質問のうち、最初に質問2を見ることにしましょう。

**Q2. キリスト教において、救われるために必要なことは何でしょうか。「神を信じる?」、「洗礼を受ける?」、「聖餐にあずかる?」、「免罪符を買う?」・・・など、救われるためには何が必要と定義されていますか?また、救われるために必要なことに歴史的変遷はありますか?**

救われるためにはどのようなことが必要とされるのでしょうか。ここではわたしたち日本聖公会の『祈祷書』に収められている「教会問答」を見ることにしましょう。そこでは、このことについてどのように言われているのでしょうか。その14番目の問答には次のように書かれています。

**14. 問 救いに必要な聖奠(サクラメント)とは何ですか**

**答** 目に見えない霊の恵みの、目に見えるしるしまた保証であり、その恵みを受ける方法として定められています

さらに、15番目には次のように記されています。

**15. 問 キリストがすべての人の救いのために福音のうちに自ら定められた聖奠は何ですか**

**答** 洗礼と聖餐です

この後の問答については、16～20番目までが洗礼に関する問答、21～25番目までが聖餐に関する問答となっていて、全部で32項目からなる問答のうち12項目が、キリストが自ら定めた二つの聖奠に集中していることから、わたしたちの教派において、救いに必要なこととして、洗礼と聖餐に重点をおいていることは明らかだろうと思います。

ところで、キリスト教の歴史において、これも大変有名なことでありますが、この聖奠(サクラメント)についての見解は、教派によって違いがあるということがあります。聖公会を含め、宗教改革時に誕生した教派は、このサクラメントが、ほんとうにキリストが定めたことに由来するかどうか、という点にこだわったということもありまして、聖公会もそうですが、なかでも洗礼と聖餐を重視する傾向はあります。ルターについては、当初は、洗礼と聖餐と告解を聖奠としていたようですが、最終的には、告解を除外するようになったようです。カトリック教会については、16世紀に開かれたトリエント公会議において、改めて、自らの位置づけを確認しておりまして、それに

よれば、洗礼、堅信、聖体、告解(悔悛)、終油、叙階、婚姻の七つを sacrament(秘跡)としております。

実は、聖公会についても、26番目の問答には次のように記されております。

**26. 問 キリストが定められた洗礼、聖餐とともに、聖霊の導きにより、教会のうちに行為されてきた聖奠的な諸式は何ですか**

**答 堅信、聖職按手、聖婚、個人懺悔、病人の按手および塗油の諸式です**

とくに、この項目に関しては、聖公会が、カトリックとプロテスタントの両方の要素を有しているように解することもできますが、今日的にみた場合にも、聖奠的な諸式というのは、とても重要な意味を有しているように思います。

ところで、救いに必要なことの規定をめぐっては、教派によってその数に違いはあるものの、教会は、このようにして、段階的に、救いへと導いていくということを行っていることと理解することができるのではないのでしょうか。

ちなみに、カトリック教会では、洗礼、堅信、聖体は入信に関する sacrament、告解と終油(ゆるしと病者の塗油)はいやしに関する sacrament、叙階と婚姻は交わりと使命を育てる sacrament と言われているようですが、ともあれ、信仰生活全体のうちに、このような sacrament との出会いがあるわけであり、その全体を根底から支えているのが、神を信ずるという在り方と言ってもよいように思います。

もっとも、神を信ずるという在り方については、どうしても、目に見える側面と目に見えない側面とがあることは否定できず、このことをめぐってルターは、救いのために必要なことは、神を信ずる信仰でありそれ以外のものではない、という主張をしたのでした。そしてそのような主張の背景には、ルターが生きていた時代に、カトリック教会が聖ピエトロ大聖堂の改築するために行ったと言われる免罪符というのがあり、それによって救われるということが広まっていたということがありました。もちろん免罪符については「教会問答」は言及しているわけではありませんが、とはいえ、わたしたちがこうしたことからまったく自由であるとも簡単に言えないこともよく心得ておく必要があるでしょう。

\*

次に質問1を見ることにしましょう。

**Q1. キリスト教における救いの定義は何でしょうか? 「だれの」、「何が」、「どのように」なれば救われたことになるのでしょうか? また、救いの定義に歴史的変遷はありますか?**

この質問に明確な仕方で答えることは簡単なことではありません。ここで言われている救いを、主として、キリスト教において救いはどのように実現していくか、完成していくか、ということと関係づけて考えることにしたいと思います。

キリスト教とその源であるユダヤ教においては、この世界の歴史を一回的なこととして捉える傾向が非常に強いです。この世界に始まりがあるように、やがてこの世界には終わりがやってくる。わたしたちは、このことを当たり前のこととして捉えているかもしれませんが、ユダヤ教やキリスト教が出現した当時においては、たとえば、ギリシア的世界観というものがあった、それはこの世界の時間は、直線的なものではなく、円環的なものであると捉えていました。日本でも、生まれ変わりというような捉え方がありますが、キリスト教においては、そのような考えには与しません。

したがって、救いの実現・完成ということになると、どうしてもこの世界の終わりということが関係してくるのです。

その叙述は、聖書で言えば、たとえば、「ヨハネの黙示録」や「コリントの信徒への手紙一」において記されています。

終末のとき、それがいつやってくるかは示されていませんが、そのときには、逝去して、いわば眠りについた人びとが起こされる時がやってくると言われていました。人びとが眠りから起こされる時、再び身体を有することになるとも言われます。そしてその身体はわたしたちが、今のこの世界でもっているような身体とはまったく違うとも言われています。霊の体という言い方もされているようです。

また、終末のとき、それは人間がそれぞれの生前の行ったことに基づいて裁きを受ける時であるとも言われています。その裁きの結果、永遠の命に与る者と共に、永劫の火に投げ込まれる者が出てくるとも記されています。そして永遠の命に与る者たちは神様と共にいて、もはや涙を流すことがなくなるような世界がやってくることも示唆されています。

また終末のときには、わたしたちは、神を向きあって見るような時がくるとも言われています。

こうした言表は、聖書の一箇所からではありませんが、終末の救いに関わることを再構成したものであります。

救いの捉え方についての歴史的変遷ということについては、今のわたしの力を超えることでもあり十分に答えることはできませんが、それでも少しだけ触れておくならば、聖書が描く永遠の命と永劫の火へと二極化するというイメージについては、それはあまりにも極端なのではないか、神様は一切が救われることを望んでいるのではないか、というような考え方も手伝って、天国と地獄の両極に加えて、煉獄という思想が出てくるということがあります。ラテン語では、purgatorium、浄化される場所、というほどの意味でしょうか。死んだ後に、魂はそこで浄化されるような場所として捉えられているようで、魂はそこで浄化された後に、天国に与ることができるというものです。このような思想が生まれてくる背景には、たとえば、「マルコによる福音書」(16. 16)や「ヨハネによる福音書」(3. 5)のように、イエスによる救いに至る道が信仰であり、それは洗礼を受けることによって表される、というような教えがある一方で、他方では、神には普遍的な救いの意志があるという教え(「テモテへの手紙一」2. 4)も表明されており<sup>4</sup>、こうした「救い」についての一様でない見解があって、それがキリスト教の歴史のさまざまな場面で影響を与えているということが考えられるのです。

\*

それでは最後に、質問3について見ることにしましょう。

Q3. 次の場合、この人は救われますか？

- ① 幼い子供を何人も殺し、死刑判決を受けた殺人犯がいます。
- ② その殺人犯が、教誨師(キリスト教の牧師)に出会い、自分の罪を悔い改め、洗礼を受けました。
- ③ 洗礼後、この殺人犯に対して死刑が執行されました。

上記の場合、この殺人犯は救われますか？また、殺人犯に殺された幼い子供達は救われますか？(子供達は洗礼を受けていません)

---

<sup>4</sup> 『新カトリック大事典 Ⅲ』(研究社、2002年)、p.507.

この質問は、洗礼を受けることによって救われる、ということをごどのように受けとめるか、ということに関連しているように思われます。

洗礼こそが唯一の絶対的な救いの手立てとして捉える立場に立つならば、心情的には納得しにくいことですが、殺人犯だけが救われ、殺人犯に殺された子どもたちは救われず、という見解も導かれないわけではありません。そして、心情的には納得できないからと言って、そのようなことは認めない、とただちに言うことも難しいかもしれません。

ただ、こうしたことに直面したときに、わたしたちが忘れてはならない視点は、何人も殺し、死刑判決を受けた人が、洗礼を受け、そのことによって何がその人のうちに最終的に起こったかどうかということについては、本当のところ、わたしたちが知りえない、少なくとも知らない部分を含んでいるということでもあります。

また、そのような殺害にあった子どもたちが、やはり洗礼を受けていないとしても、神がその子どもたちの人生を全体としてどのように受けとめていたか、ということについては、やはり知りえないことがあるということでもあります。

わたしたちは、こうしたことを即断することについては、十分慎重である必要があるでしょう。 sacramentについては、目に見えないものの見えるしと言われておりますが、わたしたちには、そのように信ずることが許されているだけであり、本当にそこに神がどのように働いているか、ということについてはそれほど明らかにはなっていないことも見落としてはなりません。ましてや、目に見えない形で神がある特定の人に働きかけていることについてはなおさら明らかになっていないことを知っておく必要があるのではないのでしょうか。

\*

救いについては、歴史における救済の問題、いわゆる救済史の問題について少し言及しておきたいと思えます。

キリスト教は歴史的宗教であると言われております。それは、聖書の教えだけでなく、聖書の教えが、そこにおいて受け入れられ、伝えられてきた、そのような場や諸制度にもまた重要性があるという意味で歴史的であるとも言えますが、より根本的には、まさしく歴史的な時間において生起するさまざまな出来事に対して、神が関わりつづけているという意味で歴史的なのであります。それは、歴史において神の救いが展開していく、完成に近づいていくという捉え方として理解することができるかもしれません。

救済の歴史については、開闢以来、現代にまで至っているわけですが、これまでたびたび引用してきたアウグスティヌスは、この救済の歴史について、最初の創造の六日と対応させるような仕方です。次のように述べています。

わたしたちは神の中に平安を得るに先立って、諸時代はこのように経過しなければならなかったからこそ、この六日という日々は理由なしに秩序づけられたのではない。(『詩編注解』92,1)

そしてそれぞれの時代には、ちょうど人間の成長にあわせて、第一の時代は幼年期、第二の時代は少年期、第三の時代の思春期、第四の時代は青年期、第五の時代は壮年期、第六の時代は老年期と区分されています。これは単に月日が経つことで年を老いていくという風には理解されていないようでもあります。むしろ、一人の人間が年齢を増すごとに内的にも成長していくように、歴史の中には何か内側から熟していくようなものが働いているようでもあります。つまりその限りで歴史は神の計画が段階的に実現していくものとして捉えられているのであります。それでは具体的にはどの

ように実現していくのでしょうか。

それはわたしたちの祖先である最初の人間アダム(およびエヴァ)が神の約束を破り、いわば墮罪することによってひとつの方向を与えられることとなります。すなわち人間は時間の経過の中で、神によってその罪から贖われる必要があるのであり、それが段階的に生じてくるのが時代区分ということになります。アウグスティヌスはこのことを、アダムと第2のアダムであるキリストとの関係において捉えようとします。つまり第一のアダムの中に人類全体がすでに萌芽として含まれていたように、第二のアダム(たるキリスト)の中に新しい人類の全体が、すなわち選ばれた人たちすべての統一が、すでに萌芽として含まれているのです。こうして人類は肉によれば第一のアダムから発し、霊によればキリストにより新たに出発することになります。

一応歴史は六つの時代に区分されていますが、その中でキリストの生誕というのはこの救済の歩みにとっては決定的な重要性を持っていることは言うまでもないことであり、その時(カイロス)に向かってそれに先立つ時代の歴史は秩序づけられることとなります。

こうして歴史は起源、経過、終極という段階を持っていますが、その方向性を決定づけるのがキリストであり、それに秩序づけられながら歴史はひとつの目的に向かって歩んでいると理解されるのであります。

アウグスティヌスにとっても、わたしたちにとっても「今」という時は、歴史において第六の時代に属しております。これはキリストがこの世界に「すでに」到来しており、しかし永遠の安息が「いまだ」到来していない、いわば「あいだ」としての「今」ということとなります。

アウグスティヌスの時代においても、すでにキリストの生誕から400年以上は経過しており、第六の時代に入ってからすでにながかりの時間が経っているわけですが、ましてや生誕から2000年を経過しているわたしたちにとってはあまりにも長くの時が経過しており、ある意味で間延びしたという感も免れ得ないかもしれません。しかしかれによれば、それでも「すでに」到来したときと「いまだ」到来していないときとの「あいだ」としての「今」なのであり、第六の時代はそれまでの時代のように世代や数によって算定されるものではないとされております。

もちろん、救済史という捉え方に対しては、他方で、歴史には神は介入しないという捉え方があることも否定できません。とくに、神は創造の最初の瞬間には働きかけたものの、それ以降は、この世界の原理に即してすべてが動いている、というような見方は、とくに、近世以降に非常に強くなってきました。総じて、近世以降の思想は、少しずつ神様を、この世界という舞台から追い出し、理性を有する人間が、世界という舞台の主役であるかのように振る舞ってきたとも言えるのかもしれませんが。

## 残された質問

Q4. 将来的に(この先)キリスト教はどのようになるとおもわれますか?

Q5. 街での伝道や訪問伝道、今の時代どう思いますか?

Q6. 若者の教会離れが目立つのはなぜですか。魅力がないからでしょうか。

これらの質問は、一つひとつ大きな問題であり、かなりの時間をかけても答えることは難しいとも言えるものばかりです。しかしながら他方で、これらの質問は一つの連関した問題として捉えることもできるかもしれません。

たとえば、こんな風に考えてみることもできるかもしれません。教会の高齢化という問題は、お

そらくは聖公会のどの教会にも少なからず起こっている問題かもしれません。その背景には、相対的にみると、質問6のように、教会に若者が来なくなっている、ということと関連しているようにも思います。どうしたら教会は人数を増やすことができるでしょうか。質問5のように、街での伝道や訪問伝道も必要なのではないのでしょうか。そして、質問4にあるように、この先教会は、あるいはキリスト教はどのようになっていくのでしょうか。このように三つの質問は深く連関しているようにも思います。

数が多ければよい、というものではないかもしれませんが、そうは言っても、数がたくさんいることで励まされることも否定できません。

教会に本当に魅力があれば、人が集まるはずだ、と言う人もいるかもしれませんが。ただ、人が集まっていないからと言って、そのことで魅力がないと判断することもできません。

教会は元々のギリシア語では「エクレシア」と言い、それは、「イエスをキリストとして信ずる人びとが集められるところ」であります。何か華やかなイベントによって集まるのとも違っていません。信ずる人びとが集まる場所です。神を信ずることも、人を信ずることも……およそ信ずることというのは、それまでに非常に時間がかかることもあります。

教会が成長していくためには、時間がかかるということを覚悟しなくてはならないでしょう。現代という社会は、次々と情報が溢れていて、それらのものに翻弄されることが多々あるでしょう。こうした中では、たしかに、教会がその本質的な部分である「信ずる」ということを大切にしようとするほど、かえって、なかなか見えるような効果が表れにくいということもあるかもしれません。

街での伝道や訪問伝道についても、そこに見える形で効果を見出そうとするならば、必ずしもうまくいくとは限らないかもしれません。現代の人びとは、直接人と向き合って応答するという文化形態から少しずつ距離を置き、そのことを苦手に行っている人も多くなってきているようにも思います。もちろん、それは意味がないということではありません。

ともあれ、人は、自分のスタイルで、自らが呼びかけられる方法で、関わっていくことが大切なのではないかと思います。自分がそのように呼びかけられて集まるようになったのなら、そのような人が他にもいるはずだ、という思いを持ちながら、自分のスタイルを築いていく、ということは存外大切なことなのではないかと思います。

\*

これらの質問をめぐって、あれこれと思いつくままに記してみました。けっしてこれらの質問に答えられたとは思っていません。

ただ、改めて確認したいことですが、教会の魅力とは、イエス様が放つ魅力であるということにあります。はたしてわたしたちはそれを本当に感じているのでしょうか、自分の中でそれは輝き続けているのでしょうか。あるいは、わたしたちは、それをすばらしいと思いながらも、自分たちの生き方によってそれを否定してはいないのでしょうか。このようなことを考えてみることは無益ではないように思っております。

将来的に、教会はどうなるのでしょうか。生きていないのでわかりませんと一方では答えたいところですが、わたしは、「信ずる」という在り方を、もっとも礎に置きながらそれを大切にしている共同体を、次の世代に対しても、可能な限り伝えていきたいと思っております。これが今のわたしにレスポンスできることであり、まさしく将来に対して有している責務(レスポンシビリティ)であると考えているからです。

(以上)